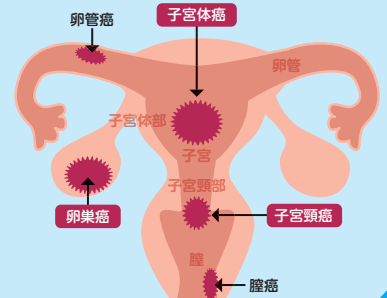


婦人科がん検診について

産婦人科 医長 島貫 洋太

昨年の11月24日（土）に開催された市民講座にたくさんのご来場、誠にありがとうございました。今回は、講演内容の要旨をまとめましたので、ご一読頂ければ幸いです。

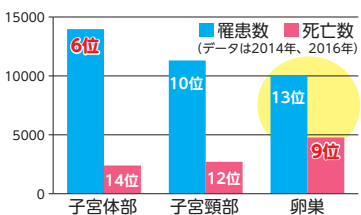
主要な婦人科がんといえば、子宮頸癌、子宮体癌、卵巣癌です。子宮頸癌については定期検診が推奨されていますが、なぜ子宮頸癌だけなのか、子宮体癌、卵巣癌について注意できることは何か、を川柳風にしてまとめましたので、ご紹介いたします。



良性や 遺伝がヒントに 卵巣癌

卵巣癌は進行するまで無症状のものが多く、治療が効きにくいタイプも存在するなど予後不良と言われており、3つの中で罹患数は少ない反面、死亡数は最多の癌です。さらに、早期発見の有効な手段が確立しておらず、集団検診で発見されることが非常に少ないのも特徴です。一方で、良性の卵巣腫瘍（皮様嚢腫、内膜症性嚢胞など）から発生する癌や、遺伝性の癌（HBOC、Lynch症候群など）があり、これらは適切に診療を進めることで早期発見・早期治療につながる可能性があります。

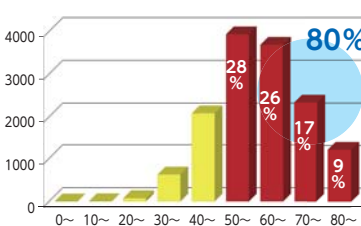
婦人科がんの罹患数・死亡数



閉経後 出血 受診 子宮体癌

子宮体癌は年々増加しており、今回紹介するがんの中では最も多いです。閉経後の発症が多いことが特徴で、50歳代が最多で、子宮体癌の80%以上が50歳以上の高齢で罹患しています。不正性器出血が典型的な症状で、子宮体癌の約90%にあると言われています。これらの特徴から早期に発見できるはずの子宮体癌で、約3割が進行するまで発見されていないことが近年の課題であり、理由の一つに、患者様の婦人科受診が遅れることが挙げられています。婦人科診察への抵抗感などから更年期以降の性器出血を放置しないようにしましょう。

子宮体癌の年齢別の罹患割合



無症状 前ぶれ見つかる 子宮頸癌

子宮頸癌は、1980年代にがん検診が導入されてから減少傾向でしたが、2000年頃から増加に転じています。少しずつ若い方における増加が目立ってきて、30~40歳代が最も多くなっています。癌の前兆にあたる「異形成」という状態があること、正常な状態から癌になるまでに5~10年程度かかること、早期癌の多くは無症状であることが特徴です。1年に1回の定期検診が推奨されていますが、検診で「異形成」のうちに見つけることができれば、早期治療につながり、子宮頸癌を前兆で捉えて予防することができます。

婦人科がんの罹患率の推移

